



◆ 第 14 回年次大会(愛知大会)を開催

2025 年 8 月 23 日(土)・24 日(日)の 2 日間、瀬戸 SOLAN 学園初等中部を会場に「いま、デジタル教科書の進化・深化・真価を問い直す」をテーマとして、第 14 回年次大会を開催しました。全国から約 120 名の方々にご参加いただきました。

○1 日目(8 月 23 日)

若手優秀賞候補発表、一般研究発表(口頭)、総会、基調講演、そして懇親会を実施しました。

基調講演では、公益財団法人教科書研究センター 事務局長・副館長 新津勝二氏をお迎えし、「教育情報化の進展と新しい教科書の使い方～教科書を読み取る力の育成～」と題してご講演いただきました。新津氏からは「教科書制度の振り返り」「デジタル教科書の現状と課題(海外事例を含む)」「教職の魅力向上」など、具体的で示唆に富むお話をいただきました。特に、「教師冥利に尽きるエッセイ」集の紹介では、多くの参加者が胸を打たれ、感動の場面もありました。

懇親会には約 30 名が参加し、研究や実践に関する情報交換を行いながら、交流を深める貴重な時間となりました。

○2 日目(8 月 24 日)

一般研究発表と 2 つのワークショップを開催しました。ワークショップでは、

- ・「教育現場におけるデジタル・シティズンシップの第一歩～タブレット活用における約束づくり～」
- ・「視覚支援のすゝめ～視覚支援教材を作ってみましょう～」

の 2 テーマが実施され、参加者が楽しみながら最新の教育実践やマインドを体感する機会となりました。

一般研究発表でも活発な質疑応答が交わされ、研究の深化が感じられる時間となりました。本年度の若手奨励賞には、西岡遼氏が選ばれました。いずれの発表も意欲的で今後の発展が期待されます。

○研究お悩み相談ブース

今回も「研究お悩み相談ブース」を設置し、教育現場の先生方に研究の進め方やテーマ設定などの相談を受け付けました。大学研究者と現場教員が連携し、実践的な研究を支える場づくりを今後も進めていきます。

ご参加いただいた皆さま、運営にご協力くださった関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。今後とも、本学会の活動へのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

日本デジタル教科書学会 会長 広瀬 一弥
第 14 回年次大会(愛知大会)大会実行委員長 稲田 健実

◆ 第14 回年次大会（愛知大会）において若手奨励賞を授与いたしました

本学会では、若手の実践者や研究者を発掘し、その活動を後押ししようと、年次大会において若手優秀賞、若手奨励賞の授与を行っています。

この賞は、35 歳以下の筆頭者を対象に年次大会へ早期締切までに投稿された研究の中から、特に優れた研究を行った方に対して贈られます。受賞者の発表は、大会初日に行われ、山口編集委員長から講評がありました。



表彰式の様子



西岡 遼氏

【若手奨励賞】

受賞者：西岡 遼 氏（つくばみらい市立伊奈中学校）

中学校理科におけるデジタルノートの継続した活用が学習内容の定着と生徒の活用に対する意識に及ぼす影響

（共著者：小林祐紀氏（放送大学）岩崎啓子氏（茨城県立竹園高校）

北濱康裕氏（金沢学院大学）白土瑞樹氏（水戸市立下大野小学校）

小内慶太氏（宮代町立須賀小学校）中川一史氏（放送大学））

この賞の選考方法は次のとおりです。

- ・学会理事から 5 名の選考委員を選出し、審査を行います。
- ・発表予稿に対して「新規性」「論理性」「有用性」「将来性」の 4 観点について、それぞれ 5 点満点で選考委員が採点します。採点時には、著者名・所属を除いた予稿を用います。
- ・上記の合計点の上位 3 名を受賞候補者とします。（今大会の受賞候補者は 2 名でした。）
- ・大会初日の午前に受賞候補発表セッションを設け、候補者にご発表いただきます。その後、選考委員の合議により、最も優れていると考えた候補者に「若手優秀賞」を、若手優秀賞に続き優れていると考えた候補者に「若手奨励賞」を授与します。（今大会は「若手奨励賞」のみの表彰となりました。）

◆ 第 15 回年次大会（京都大会）の開催について

2026 年の日本デジタル教科書学会（JSDT）年次大会（京都大会）を開催いたします。

日程は 2026 年 8 月 22 日（土）・23 日（日）に確定しています。

会場は 京都市中京区 または 京都府亀岡市 にて調整中です。

詳細が決まり次第、学会ウェブサイトにてご案内いたします。

なお、夏休み期間中の京都での開催となりますので、宿泊を予定されている方は早めのご予約をおすすめいたします。

◆ 2025 年度の体制について

2025年 8 月23日の総会において報告されました 2025年度の体制について、ご報告をさせていただきます。

【会長】

広瀬 一弥（亀岡市みらい教育リサーチセンター）

【副会長】（50 音順）

稲田 健実（福島県立相馬支援学校）（広報・組織担当）

片山 敏郎（新潟市立大野小学校）（研究・編集担当）

坂田 陽子（愛知淑徳大学）

【研究委員会】

<委員長>

稲田 健実（福島県立相馬支援学校）

<委員>（50 音順）

岩山 直樹（富山大学人間発達科学部附属小学校）

加藤 悦男（武蔵野市立桜野小学校）

工藤 豪（昭和女子大学附属昭和小学校）

島田 英昭（信州大学学術研究院教育学系）

竹中 章勝（金城学院大学 桃山学院大学）

【編集委員会】

<委員長>

山口 大輔（流通経済大学付属柏中学校）

<副委員長>

蔵富 恵（岐阜聖徳学園大学）

<委員>（50 音順）

小林 祐紀（広報委員長兼任、放送大学）

長谷川 春生（富山大学大学院）

【広報委員会】

<委員長>

小林 祐紀（放送大学）

<委員>（50 音順）

岩崎啓子（茨城県立竹園高校）

小内慶太（宮代町立須賀小学校）

【事務局】

<事務局長>

久富 望(京都大学教育学研究科)

<副事務局長>

杉山 一郎(十日町市立馬場小学校 教頭)

<事務局員>

上田 昌史(一般財団法人マルチメディア振興センター)

水越 綾(杉野服飾大学)

山本 周(聖護院中学校・高等学校)

【監事】

林 俊行(新潟市立亀田東小学校)

高瀬 浩之(東京都立調布北高等学校)

【顧問】

岩居 弘樹(大阪大学)

【ICT CONNECT 21 担当】

担当理事 高瀬 浩之(東京都立南葛飾高等学校 教諭)

【大会実行委員会】

<委員長>

広瀬 一弥(亀岡市みらい教育リサーチセンター)

<事務局長>

林 一真(岐阜聖徳学園大学)

◆ 学会誌「日本デジタル教科書研究」への投稿募集

デジタル教科書研究の投稿論文を随時募集しています。一般論文、展望論文、実践論文の3つのカテゴリーがありますが、実践論文を積極的に評価しています。原著論文ほどの厳密さがなくても、実験段階の理論を実践的に応用した研究、新しいアイデアの実践的検証等を報告論文として積極的に評価します。もちろんアカデミックな一般論文、展望論文も歓迎します。

デジタル教科書研究の詳細については、学会ウェブサイトをご覧ください。

<https://js-dt.jp/2013/12/3354/>

論文の投稿、お待ちしております。

デジタル教科書学会編集委員長 山口大輔(流通経済大学附属柏中学校)

◆ 実践研究論文化支援プロジェクトの参加者募集

研究委員会では、ICT 活用教育の優れた実践の公開をサポートしています。「学術研究として実践を公開したいが、学会発表や論文執筆の方法がわからない」という方がいらっしゃれば、ぜひご連絡ください。学術研究の専門家である本学会所属の研究者が協力することで、学会発表や論文執筆を支援します。

詳細はウェブサイトをご覧ください。

https://js-dt.jp/supprt_project-2/

デジタル教科書学会研究委員長 稲田健実（福島県立相馬支援学校）

◆ 研究プロジェクト・研究グループへの研究費助成について

日本デジタル教科書学会では、会員の研究活動を支援するために、研究プロジェクト・研究グループへの研究費助成を行っております。

会員の皆様の積極的な応募をお待ちしております。研究プロジェクトへの助成額は最大10万円、研究グループへの助成額は最大5万円です。研究プロジェクトでは本学会論文誌への投稿と本学会年次大会における発表、研究グループでは本学会年次大会における発表を求めるなど、応募の条件があります。詳細は学会ウェブサイト（http://js-dt.jp/research_support/）をご覧ください。申請は随時受け付けております。ただし、本学会の研究助成に関する年度予算額の上限に達した時点で受付を終了いたしますのでご了承ください。皆様の積極的な取り組みを期待いたします。

◆ 研究会開催助成について

日本デジタル教科書学会では、会員の皆様の主体的な研究会の開催支援、研究活動の活性化、研究の発展、会員相互の連携を促進すること等を目的に、研究会開催助成を行っております。申請に関する詳細は本学会ウェブサイトをご確認ください。会員の皆様の積極的な応募をお待ちしております。

（本学会サイトトップページ上部の“学会への申請一覧”の“研究会開催助成について”をご覧ください。申請書もこちらからダウンロードして頂くことができます）

（http://js-dt.jp/seminar_support/）

◆ 会員の声 Vol.5 (茨城県つくばみらい市立伊奈中学校 西岡遼)

私が日本デジタル教科書学会に初めて参加したのは、広報委員長でもある小林先生から「一緒に研究をやってみないか」とお誘いをいただいたことがきっかけでした。そのとき初めて本学会にて発表を経験しました。私にとって本学会は、研究への第一歩となった特別な思いのある学会です。学会に参加するたびに、同じ志をもつ先生方と出会い、意見を交わすことで、自分の教育観や研究の方向性が広がっていくのを感じます。これまで続けてこられたのは、学会での温かい交流や励ましのおかげだと感じています。



学校で教員として日々働いていると、授業や生徒指導に追われ、研究として体系的に取り組む機会は多くありません。その中で日本デジタル教科書学会と出会い、研究という視点を持てたことは私にとって大きな転機でした。自分の授業を主観的に振り返るだけでなく、客観的なデータを交えて検討できるようになり、授業に対してより確かな自信を持てるようになりました。

それ以来、毎年、年次大会で私自身の研究について発表したり、他の参会者の方の発表をお聞きしたりするなど参加を続けています。年次大会が毎年開催されることで、研究を継続的に進めるための明確なマイルストーンとなり、日々の実践を見直す良い機会になっています。学会での交流を通して、現場の先生方の実践や研究の進め方を学ぶことができ、自分の授業改善や研究の方向性を考える上で大きな刺激を受けています。

また、今年度の年次大会では、若手奨励賞をいただくことができました。このような賞が設けられていることは、若手教員・研究者にとって大きな励みであり、「自分もチャレンジしてみよう」と思わせてくれる取り組みと感じています。今後も学会での活動を通して、日々の教育実践を理論的に捉え直し、研究として発信していけるよう努めていきたいと思っています。